

山内祥史著 『若き日の日野啓三昭和二十年代の文業』

高橋, 亮
九州大学大学院地球社会統合科学府 : 博士後期課程二年

<https://doi.org/10.15017/1901733>

出版情報 : 九大日文. 28, pp.116-118, 2016-10-01. 九州大学日本語文学会
バージョン :
権利関係 :

山内祥史著

『若き日の日野啓三 昭和二十年代の文業』

TAKAHASHI
高橋 亮

前回発行の同誌において、筆者は本著の著者である山内祥史氏が以前に著していた『太宰治の『晩年』—成立と出版』（秀明出版会 二〇一五年）の書評を扱う機会に恵まれた。その著作で山内氏は、太宰治の初期作品集である『晩年』について、刊行に到るまでの詳細な経緯や、収録作品の事細かな書誌情報などを紹介していた。こうした試みについて、著者は太宰治研究の根幹を補強すると共に、ひいては将来この分野に携わるであろう研究者達の、ひとつの指針ともなる事を期待していた。そして、こうした文学研究の資料的な拡充と進展に基づいた、後継への貢献をも視野に入れた著者の目的意識は、本著の内容においても遺憾なく発揮されている。

本著では、日本文学史における「内向の世代」の一角を占める作家・日野啓三について、研究・調査が比較的に手薄となっている昭和二十年代の文芸的な活動の内容を、様々な文芸雑誌における動向を中心に明らかにしていくことが主目的となつて

いる。

本著における章立ての構成は、以下のようになっている。

- I 「向陵時報」紙上の日野啓三
- II 「現代文学」誌上の日野啓三
- III 「近代文学」誌上の日野啓三―昭和二十六年まで
- IV 日野啓三・昭和二十七年の文業
- V 日野啓三・昭和二十九年の文業
- VI 日野啓三の著書
- VII 日野啓三創作一覧集

ここでは、青年期の日野啓三が携わった文芸誌（紙）を順を追って配置した後、特定の媒体に拠らない、その後の文業についても明示していくという形式を取っている。こうした書誌構成上の特徴からも分かるように、本著は考察対象となつて昭和二十年代における日野の文芸的活動を包括的に論述するより、その実際的な内容を時系列に添って明らかにしていくことを主眼においている。また本著の末尾には、対象の期間には該当しない日野作品を、発表された順に従って網羅した一覧表も記載されている。これについて、著者は「日野啓三の文学的業績を将来に伝え遺したいという想いと、将来出現するだろう、日野啓三の文学的業績の優れた研究者のために、僅かでも基礎資料を整備しておきたいという想いと、二つの想いから編んだ」としている。先述でも触れたように、筆者の昨今の著作群

においては、今後の文学研究の発展への寄与という目的意識が共通している。こうした特徴的な傾向は本著でも一貫しており、著者が自身の著作へと託している「想い」の一端は、事実関係の確認と把握が容易となつている構成からも窺うことが出来る。

本著の主な内容としては、まず日野が旧制第一高等学校へと進学した後に関与した「向陵時報」「現代文学」「近代文学」の三つの文芸雑誌（紙）を中心に扱い、それぞれにおける活動の実態と、以後の文学的活動への影響について言及している。第一高等学校寄宿寮発行の文芸紙であり、日野もまた「永劫の囚」及び「同志」という創作を発表していた「向陵時報」について、著者はこれを「文藝部」復活の夢は碎かれていた当時、「文学」に目覚めた一高校生日野啓三が作品を投稿できる機会」を唯一与え得た、日野へと「文学への目覚め」を促した重要な存在と位置付けている。

一章では、この「向陵時報」に関する当時の日野の文芸活動について、周囲の関係者の発言等も参照しながら詳らかにしている。その中で、本書では不明とされている「向陵時報」第百六十五号の編集後記の担当者を、複数の要因から日野であるとする著者の推察は、この時期の活動を扱う他の研究者にとつても一助となる示唆であると思われる。また、この章には末尾に「付」として「戦後の向陵時報」も加えられている。これらの、日野の初期における文芸活動とは密接な関係性は窺えない調査内容は、しかし同時代の日野が在った文学的な環境や背景を把

握する上において、非常に有用な情報とも成り得るだろう。

続く第二章では、「向陵時報」に始まった「文学的力量を大きく進展させた、貴重な同人雑誌」である「現代文学」を扱っている。発行計画が「昭和二十四（一九四九）年の頃、官立第一高等学校の明寮三階図書室で進められた」というこの文芸雑誌については、共同での発起人である大岡信の言説を踏まえながら、当時の日野の作品に対する評価と合わせて解説をしている。当時、日野が発行に携わった同人雑誌は、他に「二十代」がある。この創刊号に掲載された「若き日のドストエフスキイ」は、日野自身も「初めて文学にかかわる文章」であると述懐している意義深い作品とされている。しかし、本章では更に活動の規模を拡大させ、「二十代」で得た反省を作品へと昇華し得た「現代文学」に重きをおき、各号における日野の文業について、他の掲載作品などの書誌情報と合わせて詳細に示している。

三章では、同時代の文芸評論家である荒正人の交流を介して接近した、「近代文学」での活動に焦点を当てている。荒正人の主張する「論理よりもレトリック、思想よりも表現」という姿勢は、若き日の日野へと表現の多様性を意識させ、「自己探求」と「自己表現」を両立させる技法を示唆したとされている。そして、「様々なものの価値と意味とを、根源的にかつ主体的に問い直す、その内的必然の源泉」を学ぶことで、日野の文学的な営為は以降、「これまでの根源性主体性を、問い直し掘り下げていくことに力が尽くされた」とされている。そうした、文業的、思想的変遷の最初期に当たる「近代文学」時代の日野

の活動について、本章では「野間宏論」「イリヤ・エレンブルク論」「堀田善衛論」を時系列ごとに節に分け、それぞれの内容から窺える特徴を精密に解説している。これら「近代文学」誌上の三つの評論は、「政治と文学」という主題において一貫している。しかし、著者はこれらの稿が進むにつれて、日野の問題意識が「物自体と現象の境界の溶け去った世界」「抽象それ自体」と、その「世界」「抽象」を「認識する方法」「定着する技術」へと拡張・深化された点において、日野の文学的な足跡を辿る上でも「近代文学」は重要な意味を持つと論じられている。

本著の後半では、以前と比較して「洗練されて精度を高め、言葉はよりの確に、修辭はより精密に、論理の展開はより巧みに」なつたと著者の評する、昭和二十七年以降の日野の言説へと考察の対象を移している。著者の調査に拠れば、昭和二十八年中には「日野啓三」署名の文章は発見されず、対象は昭和二十七年、二十九年の期間中のものに限られている。しかしながら、昭和二十九年に「新日本文学」に共同執筆の形で連載された「読書ノート」群について、署名が「日野啓三」であるという特徴的な類似点以外に、他の共同執筆者が日野と関係性の深い者達であること。そして、後年に発表された日野の処女作である小説「向う側」が、「野火啓」という共通性の窺える署名で著されていたことから、この「読書ノート」の執筆者の一人である「日

野啓三」は「日野啓三」と同一人物であるとした推測は合理的かつ整合的であり、著者による資料的な調査は徹底された信頼性の高いものであると考えられる。故に、本書の末尾の章である、収録作品の内訳も含めたあらゆる刊行本の書誌情報を網羅した「日野啓三の著書」や、日野署名の創作作品の発表時標題及び発表誌紙の名称・巻号・収録頁などを詳細に記した「日野啓三創作一覽稿」もまた信憑性に優れ、研究資料的な価値も高いと判断するのは妥当であると思われる。

日野啓三の昭和二十年代の文業を、可能な限り詳らかにすることを目的とした本著では、確たる証拠や情報が不足しているため、事実関係は不明とされている事柄も少なくはない。しかし、それは著者による徹底的な調査によって、「分らない」ことが判明したという点において、文学研究的な側面からも非常に有意義な結果であると言える。また、日野研究へと携わる者にとつても、こうした現時点での研究史的な不備を把握することは、大きな指針となり得るのであろう。これらの特徴からも、本著は日野啓三研究の資料面での補強と発展に留まらず、文学の資料的な研究全体に敷衍可能な、一つの大きな道筋と手法を示していると理解できるのである。

二〇一六年一月 和泉書院 二二三頁 三三〇〇円＋税

（九州大学大学院地球社会統合科学府博士後期課程二年）